
格好いい人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
格好いい人

【Nコード】
N0593H

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
鈴木裕さんは海が好きで船乗りになった。一度は身体を壊し船を降ろされてしまうがそれでもまた船に乗りたくて。作者の知り合いの方をモデルにした作品です。

第一章

格好いい人

「僕はね」

鈴木裕さんは私に静かに話しはじめた。

今私達は海が見える喫茶店にいた。そのテラスの席から海を見ながら話している。テラスはテーブルも椅子もそしてテラス自体も白くまるで雲のようだ。私達はそこから話をしていた。

「駄目な人間だったんですよ」

「まさか」

私は鈴木さんのその話をまずは否定した。

「鈴木さんは立派な人ですよ」

少なくとも私の知る限りはそうであった。この人は船乗りで身体は細いが力仕事もしかりとできるしデスクワークも的確だ。職場でもそれでかなり有名な人である。できる人として。

「それがどうして」

「そうじゃないんですよ」

けれど鈴木さんはそれを自分で否定するのだった。

「最初はね。酷いものでしたよ」

「そうなんですか？」

それを聞いてもとても信じられなかった。

「まさかとは思いますがけれど」

「全然できなくて」

また私に話してきた。眼鏡の奥の目がとても優しい。小柄で七三分けにしているのでとても船乗りには見えない。まるで銀行員のようだ。

「しょっちゅう怒られていましたよ」

「船ですか」

「その時のこと御聞きしたいですか？」

「ええ、是非」

私は一も二もなく鈴木さんに答えた。

「御願います。どうか」

「わかりました。それでは」

鈴木さんは私の言葉を受けて話しはじめてくれた。それは今の鈴木さんからはとても想像もできないことだった。

鈴木さんは海が好きだった。港町で育ち子供の頃から海を見て育っていた。だから大人になったら船乗りになろうと決めていた。

そしてその願いのまま高校を卒業したらすぐに船乗りを目指した。入社試験に合格してそれですぐに船に乗った。ところが船の世界はとても厳しいものだった。

鈴木さんは大柄でごつい身体の船乗り達に囲まれ力仕事に雑用をした。しかしこれが小柄な鈴木さんには極めて辛いものだった。

「ほら、これを持って」

「あれ運んでおけ」

次から次にその重い荷物を運ばさせられる。しかも休む間もなく雑用を命じられる。鈴木さんは次第に消耗していき船の中でへばってきいてた。

「あいつどうなんだ？」

「駄目だろ」

先輩達はそんな鈴木さんを見て言うのだった。

「ひ弱だしな」

「体力ないからな」

口々にこう言って鈴木さんに駄目出しをした。そうして鈴木さんにさらに仕事を押し付ける。押し付けると言う言葉は極端かも知れないがそれでも仕事が続いたのは事実だ。

消耗していく鈴木さんはやがて誰の目からも明らかなまでにやつれ細っていった。それで多少なりとも優しい心を持つ人達は鈴木さんに忠告をした。

「おい、鈴木御前」

「もう辞めたらどうだ？」

鈴木さんを氣遣つての言葉だった。

「これ以上働いたらそれこそだ」

「身体壊すどころじゃないぞ」

「いえ、大丈夫ですよ」

けれど鈴木さんはそれでも船に乗り続けた。幾ら消耗しても船が、そして海が好きだった。だからあくまで船に乗りたかったのだ。

「やれますから」

「いや、もう無理だろ」

「御前は船乗りには向いてない」

そして遂にはこう言われたのだった。

「もうな。辞めろ」

「船から降りろ」

そう言われた。しかし鈴木さんはそれを聞こうとせず船に乗り続け遂には。本当に身体を壊し倒れてしまった。ベッドから起き上がれなくなってしまったのだった。

こうして鈴木さんは船から降ろされた。そのまま会社のデスクワークに任された。そんな鈴木さんに対して会社の人達は口々に言った。

「もう御前は船には乗れない」

「だからここで仕事しろ、いいな」

「船には乗れないんですか？」

「そうだ」

こう言うのだった。

「二度とな。御前には向いてなかったんだ」

「だからここで仕事しろ」

「絶対にな」

「いえ、僕は」

しかしであった。鈴木さんは言ったのだった。

「船が好きです。また船に乗りたいです」

「船につてだからそれはもう無理なんだよ」

「不可能なんだよ」

誰もが口々に言うのだった。

「もう御前はな。身体も壊したしな」

「それで何で船に乗れるんだよ」

「いえ、乗ります」

鈴木さんの決意は強かった。その都度はっきりと言うのだった。

第二章

「絶対に。また」

「何度も言うがそれは無理なんだよ」

「乗れたらそれこそ奇跡だ」

「こうまで言われるのだった。」

「それでどうしてなんだ？」

「そこまで言えるんだ」

「身体。鍛えます」

「まずはこう言う鈴木さんだった。」

「それで体力つけて」

「何でそこまでして乗りたいんだ？」

「辛かったんじゃないのか？」

「皆それを聞いて眉を顰めさせるばかりだった。」

「だから倒れたんだろう？」

「意地悪もされたんだろう？それでもか」

「海、好きですから」

鈴木さんはその都度言った。

「船も好きですから。大好きなんです」

「そんなに船がいいのか」

「海も」

皆それを聞いてまた首を傾げさせるばかりだった。

「あそこまでされてか」

「それでもか」

「倒れたけれど辛くなかったです」

これが鈴木さんの受けた感覚だった。鈴木さんは身体こそ壊したが精神的には辛くはなかったのだ。やつれてしまってもだ。

「だからまた」

「やれやれ。もう言うっておけ」

「勝手にしろ」

皆鈴木さんの言葉を聞いて遂に匙を投げたのだった。

「そこまで言うんならな」

「どうなっても知らないからだ」

「僕はまた乗ります」

鈴木さんの決意は強かった。

「そう、何があっても」

鈴木さんは実際に身体の調子が元に戻るとすぐに鍛えはじめた。ランニングに筋力トレーニング、それにストレッチ。身体のケアも忘れず必死に鍛えた。

その結果身体は細いままだったがそれでも力はかなりついた。それで自信を持った鈴木さんはその時の上司に対して直訴したのだ。

「また船に。御願います」

「駄目に決まっているだろう」

上司はすぐにこう鈴木さんに返した。

「御前は身体を壊して船を降りたんだぞ」

「もう身体は戻りました」

しかし鈴木さんはまだ上司に言うのだった。

「それに力もつきましたし」

「それでも駄目だ」

上司はあくまで聞こうとしなかった。鈴木さんの要望をつっぱね続ける。

「また身体を壊したらどうするんだ？」

「それはないです」

鈴木さんも引かない。強い声で言った。

「それだけはないように鍛えましたしそうしますから。ですから」

「それでも駄目だ」

上司も責任があったのだろう。鈴木さんの言葉を何としても引かない。その場は鈴木さんを下がらせた。しかし鈴木さんはそれでも諦めなかった。

その日だけでなく機会があれば上司に直訴した。何度も何度も。そうして遂にだった。上司も折れたのか溜息と共に鈴木さんに対して言った。

「そんなに船に乗りたいのか？」

「はい、絶対に」

鈴木さんの願いは変わらない。まさに矢の一念だった。

「乗らせて下さい、御願います」

「船が好きなのか」

「好きです」

それ以外に返答はなかった。

「それと海が」

「そこまで好きか。船に乗りたいのか」

「駄目ですか？それは」

「何度も言うが御前は身体を壊して船から降ろされた」

上司は今度は鈴木さんの目を見た。目には強い決意があるだけだった。

「それに色々あったんだろう？」

「楽しかったです」

確かに鈴木さんは消耗しきるまで酷使された。少なくともその時には力のなかった鈴木さんにとってはそれは酷使だった。しかし鈴木さんはそれでも言ったのだ。

第三章

「船にいましたから」

「船にいたらそれで楽しいのか」

「船が好きですから」

やはりこう言うのだった。鈴木さんは。

「そして海が好きですから」

「それだけでいいのか」

「はい、それだけで」

上司に対してはつきりと答える。

「僕は満足なんです」

「欲があるのかないのかな」

上司は鈴木さんの言葉をここまで聞いて溜息を出した。また呆れたように。

「御前という人間は」

「駄目ですか？」

「駄目とは言っていない」

上司の呆れたような声が続いた。

「それはな。ただな」

「ただ？」

「また身体を壊しても知らないぞ」

言葉はいつもとは違っていたいつもは頭から退けていたというのにだ。この時は呆れた声ではあったがそれでもこう言ったのである。

「それでもいいんだな」

「またっていいますと」

「もう好きにしろ」

上司はまた言った。

「御前の好きなようにな。いい」

「いいんですか!？」

鈴木さんは上司の今の言葉を聞いて思わず声をあげた。

「それじゃあ船に」

「船が好きなんだろ」

今度は苦笑いではあったが笑いながらの言葉だった。

「そして海が」

「そうです」

言葉には偽りが無い。鈴木さんは決して嘘はつかない。あくまでまっすぐな人だ。ここまでまっすぐな人を私は他には知らない。そこまでまっすぐな人だ。

「大好きです」

「だったら乗ればいい。それに駄目って言っても何度でも要望を出しただろ？」

「はい、本当に」

鈴木さんのこの時の言葉にも偽りがなかった。

「何があっても」

「だったら乗れ。船の方には俺が言っておく」

「有り難うございます」

「しかし。御前みたいな奴ははじめてだ」

上司の呆れた言葉は続く。

「こんなに船が好きな奴はな」

「今度は降りないようにします」

「頑張れよ」

「はいっ！」

鈴木さんの顔はこれまでに最も明るい顔になっていた。こうしてまた船に乗ることになった。そして今に至るのである。今私達がいるここに。

「そんなことがあったんですね」

「そうなんですよ」

微笑んで私に言う鈴木さんだった。

「それで今僕は船に乗ってるんですよ」

「船に海ですか」

私は話を聞きながらふと海の方を見た。丁度そこに一隻の船が見える。船は汽笛をあげながら水平線の丁度上を進んでいた。

第四章

「その二つが」

「僕はその二つがあればいいんですよ」

鈴木さんも海を見ていた。そしてまた微笑んでいた。

「その二つがあれば」

「そうなんですか。その二つが」

「はい、そうです」

また微笑んで私に話してくれた。

「今度は身体を壊さないようにしてますよ」

「それであくまに船にですか」

「やっぱり好きですから」

船に乗りたい理由はそれしかなかった。

「船が」

「そして海が」

「はい、僕はこれからも船に乗ります」

鈴木さんの願いはそれしかなかった。

「もう二度と降らないようにして」

「頑張ってください」

私は微笑んで鈴木さんに話した。

「その御心があれば絶対に大丈夫ですよ」

「大丈夫ですか」

「はい、何があってもです」

私も鈴木さんに言った。

「鈴木さんは絶対に船から降りませんよ」

「そうですか」

「心ですね」

私はまた言った。

「やっぱり。心があればそれで通っていくことができます」

「僕もそう思います。心があれば大丈夫です」

「じゃあ僕は」

「鈴木さんには心があります」

私も何度も言った。鈴木さんの話をここまで聞いて言わずにはいられなかった。

「ですから」

「心ですか」

鈴木さんは私の言葉を聞いて少しずつ考える顔になった。

「それがあればですね、やっぱり」

「そうですよ。もう船に乗るのは無理だって言われたんですよ」

「はい」

鈴木さんはまた私の言葉に素直に頷いてくれた。

「そうです。その通りですよ」

「けれど鈴木さんは船に戻ることができました」

これが答えだ。鈴木さんは大好きな船に戻ることができた。一言で言えばそれだけだ。しかしそれで終わりというわけでもないのだ。

「その心があるから」

「何でも確かな心があれば」

鈴木さんは微笑んで述べてくれた。

「願ひも。一度は挫折した願ひも」

「叶えることが出来ますね」

「そうですね。本当に」

その微笑みで私に答えてくれた。私はそんな鈴木さんを見て心から尊敬した。確かにあまり器用とは言えないし優男だ。けれどその心は誰よりも強くそして格好いい。この人の格好よさ、心の格好よさを見ることができて私もまた心から満足した。

「それでですね」

「はい、今度は」

今度は鈴木さんが私に声をかけてきてくれて私もそれに応える。

「またすぐに船に乗ります」

「そうですか。またですね」

「今度はインド洋に行きます」

鈴木さんはまた海を見ていた。遥かな水平線からまだ続いているその海を。

「長くなりますよね」

「楽しんできて下さいね」

「はい、船は本当に最高ですよ」

鈴木さんの笑みは満面の笑みになっていた。

「そして海も」

「そうですか」

私もまた満面の笑みで鈴木さんの言葉を聞くことができた。そしてそのうえで神に感謝した。この格好いい人と出会えたことを。そして心で握手できたことを。感謝せずにはいられなかった。

格好いい人

完

2009・5・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0593h/>

格好いい人

2010年10月8日15時16分発行